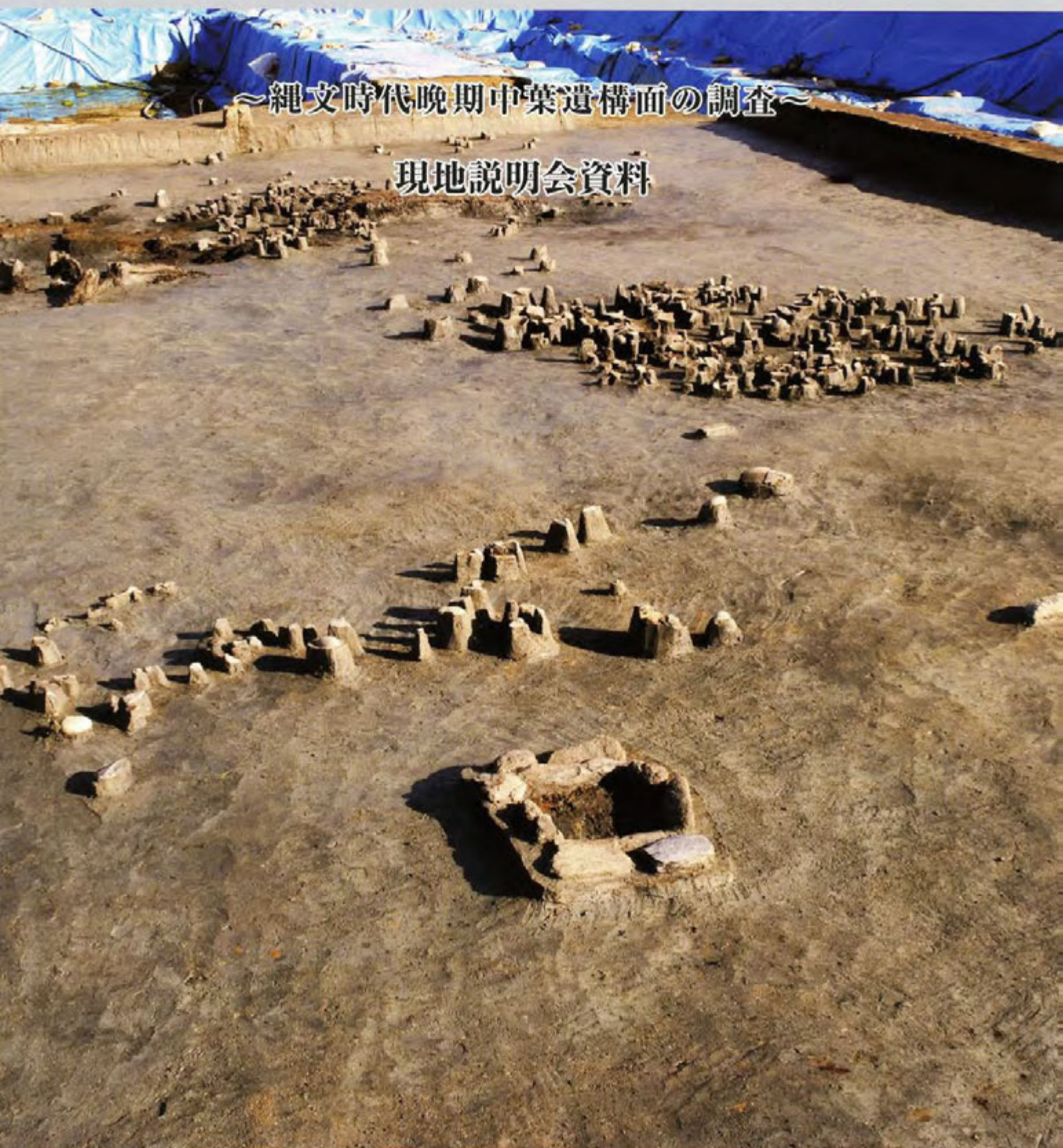


橿原市観音寺

観音寺Ⅰ区

～縄文時代晩期中葉遺構面の調査～

現地説明会資料



2008. 12. 7

奈良県立橿原考古学研究所



調査地位置図
(国土地理院1/25,000地形図「殿傍山」・「御所」を使用)



●土器棺墓1 (東から)



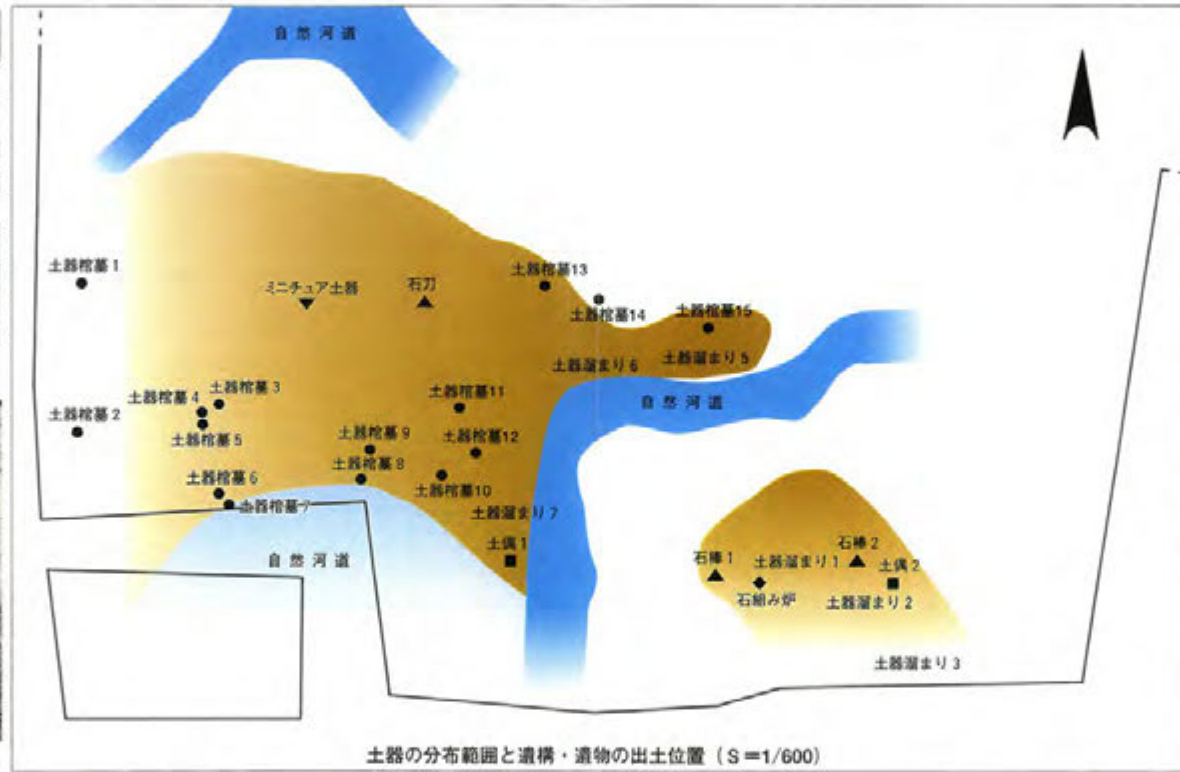
●土器棺墓2 (北から)



●土器棺墓4 (西から)



観音寺I区と周辺調査区 (S=1/5,000)
(1/5,000 御所市都市計画図 No.5・橿原市都市計画図 No.19 合成)



土器の分布範囲と遺構・遺物の出土位置 (S=1/600)



●土器棺墓7 (北から)



●土器棺墓5 (北東から)



●土器棺墓9 (南から)



●土器棺墓8 (南から)



▼ミニチュア土器 (南から)



▲石刀 (南から)



■土偶1 (西から)

【はじめに】

今回の現地説明会は、京奈和自動車道建設に伴う発掘調査として、橿原市観音寺町において平成20年4月2日から行っている観音寺Ⅰ区を対象としています。なお、昨年度には今回の調査地の北側を観音寺Ⅱ区として発掘調査を行い、弥生時代中期前半の方形周溝墓を多数検出するという、成果が得られています。また、道路を挟んだ東側では観音寺Ⅲ区として発掘調査を行い、縄文時代から中世にいたる各時期の遺構・遺物が確認されています。

観音寺Ⅰ区では、上層遺構面と下層遺構面の2面の遺構面を確認しました。このうち、今回は大きな成果が得られた下層遺構面の成果を中心に報告します。上層遺構面では、弥生時代中期前半の方形周溝墓や、弥生時代後期から古墳時代前期の自然河道・溝や、中世の掘立柱建物・井戸などを確認しました。

なお、観音寺地区で確認しました遺跡は、今回の調査で新たに確認した遺跡であることから、遺跡の範囲・名称については、周辺地区の調査成果とあわせて、将来的に決定していく予定となっています。

【調査成果】

遺構

下層遺構面では、縄文時代晩期中葉頃の自然河道・土器棺墓・方形石組み炉・土器溜まりを確認しました。土器棺墓は15基検出しました。近畿地方では縄文時代晩期中葉以降の土器棺墓は、数基から数十基が群集することが、他の遺跡の調査成果から知られており、今回の調査でも同様の傾向があることが確認できました。また、検出した土器棺墓は斜めないしは横向きに埋設されるものが多く、この点も近畿地方の土器棺墓に共通してみられる特徴となっています。方形石組み炉は、長辺約80cm×短辺約55cmの石組みの炉で、短辺の内側には、板石がはめ込まれています。石組み炉の周辺では、柱痕が確認できないことから、屋内炉ではなく、屋外炉であった可能性が高いと考えられます。なお、石組み炉は、近畿では縄文時代中期末から後期初頭の事例が一般的ですが、縄文時代晩期中葉の事例はほとんど知られておらず、貴重な事例であると考えられます。また、この石組み炉の東側には、径3～4mの範囲に土器などが

多量に投棄された土器溜まりを3ヶ所で確認しました。このうち、土器溜まり1の土を洗浄すると、サヌカイトのチップ（石器を作る際に出る石屑）が多量に含まれており、ここで何らかの石器の加工を行った可能性が高いと考えられます。一方、土器溜まり2の土を洗浄すると、サヌカイトチップはほとんど含まれず、獣骨と考えられる骨が多量に含まれていました。土器溜まり2には、焼土を伴うことから、ここで動物の解体・調理が行われた可能性が高いと考えられます。

遺物

土器・石器・種子・獣骨などが出土しました。土器はいずれも「篠原式」とよばれる縄文時代晩期中葉（約3,000年前）のもので、深鉢・浅鉢などがあります。また、土偶が2点出土しました。石器は石鏃が最も多く、石棒・石刀・石斧などがあります。種子にはドングリ・クルミをはじめとして、数種類があります。これらはいずれも土器溜まりの土を洗浄した際に出土したのですが、基本的に土器溜まりの場所が異なっても、含まれる種子の種類に大きな差はないことから、縄文時代晩期中葉頃の調査地周辺の植生を反映しているものと考えられます。獣骨は主に土器溜まり2と土器溜まり7から出土しました。このうち、土器溜まり7から出土した獣骨の多くは、鹿の骨だと考えられます。

【まとめ】

今回の調査では、縄文時代晩期中葉の遺跡が調査地周辺に広がることが確認できました。これは、観音寺Ⅰ区の東側で当研究所が行った観音寺Ⅲ区の調査や、南側で御所市教育委員会により行われた本馬地区の調査でも確認されており、活発な人間活動が行われていたと考えられます。調査地周辺をはじめとして、縄文時代晩期には、盆地内で確認される遺跡数が増加することが指摘されており、今回確認した遺跡も、その一端を示す事例と考えられます。

また、縄文時代晩期の土器棺墓は群集することが知られていますが、今回確認した土器棺墓には、河道に沿うようにほぼ等間隔に点在するものがあるなど、あまり例のない配列方法を採用しており、当時の人々の墓に対する意識を知るうえで、貴重な成果が得られたといえます。

観音寺Ⅰ区

～縄文時代晩期中葉遺構面の調査～
現地説明会資料

2008年12月7日

奈良県立橿原考古学研究所

〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地 Tel. 0744-24-1101

<http://www.kashikoken.jp/>

(ホームページでも現地説明会の案内・説明内容をご覧いただけます)